運動会と体育祭の違いって、玉入れがあるかないかだけ？

ドーナツ教開祖　安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運動会と体育祭の違いって、玉入れがあるかないかだけ？

【Ｎコード】
Ｎ９６３１Ｎ

【作者名】
ドーナツ教開祖　安藤ナツ

【あらすじ】
市民体育祭の軍団長を頼まれた本屋の店主。
勿論、彼がそれを気軽に了承するわけもない。
一体、店主の気持ちを動かすのは何なのか。

（前書き）

体育祭って、別になくても全然問題ないですよね。

ありえないなんて、ありえない。
そんな言葉遊びのような言葉がある。
読んで字の如く、この世に、存在しないことなど存在しないと言う、明らかに矛盾した意味の言葉だ。
とにかく、この日小野なつめは信じられない物を見た。そう言う話だ。

「うわ、私以外に先客がいるよ」

滅多に使わない消しゴムをなくしてしまった小野が、学校帰りに行きつけの本屋に行くと、そこには男女二人が店内にいたのだ。今まで一回も客を見たことがないとは言わないが、先客がいるのは初めてだった。
もっとも、その内一名は知っている人間だったので驚きは半減してしまったが。
この日本で袴姿を私服としている人を見ても驚かなくなってしまったのは、別の意味で残念なことだが。
そうこの店の店主の幼馴染にして、色々あって複雑な関係になっているはずの多鞘関守が店内にはいた。
ただその横にいる背の高い、後姿だけで美人とわかるようなスーツ姿の女性には、まったく見覚えはなかった。
割と人見知りする性格である小野は、取りあえず物陰に隠れて三人の会話に聞き耳を立てることにした。

「あー、悪い。もう一回最初から言ってくれない？　うおっ、強いってこいつ。何？　さっきの黒い竜より絶対こいつの方が強いじゃ

ん。パペットマペットみたいな両腕なのに」

まず、耳に入って来たのは店主の声。どうやら、新作の国民的ゲームをやっているらしく、関守と女の話をまったく聞いていなかったらしい。ちなみに、なつめはそのパペットマッペットに全滅させられた口である。と言うか、ラスボスのモンスターはどれも意味不明なくらいに強かった。

「ですから、今度の市民体育大会の際にチームのリーダーになって欲しいんですよ」

苛立ちを隠さない女の声。ゲームをしていたから話を聞いてませんでした。と、言っていいのだから当然だろう。

「あーはいはい。パス一で」

そんな彼女に対する、店主の対応は超適当だった。

必死にどうあの魔竜を倒すべきか、店主の頭の中はそれだけで精一杯のようだった。

「あ、拙者もパス一で」

その画面を覗きこんでいる関守が、「あ、塊使えばよかろう」と口を出しながら女性の言葉に答える。

女性も関守に質問した気はなかったらしく、サムライ男を無視をして店主に声を荒げる。

「パスじゃあなくてですね、この町に貢献してくれてるお二人に出て貰えばきっと盛り上がると思うんですよ」

「あのさ、秘書のねーちゃん。俺が一体この町に何したよ？」

「そうだぞ、この『エリクサーは倉庫の肥しにする派』が、一体何の功績を遺したと言うんじゃ」

ここまで盗み聞きして、小野にも大体話が見えてきた。

来月の中頃に、町興しを目的とした『市民体育祭』が開かれる。いつだったか空手の大会が開かれた、あの市民体育館の区画を使った結構大がかりなものだと小野は聞いていた。

その際、『紅軍』『白軍』と二チームに別れるのだが、店主と関守はその軍団長に指名されているらしい。

いったい、この冴えない本屋の店主が何をすればそんな役職に就けるのだろうか？

「店主さんは、毎年何百万円相当の本を寄付なさって下さっています。それに七年前の病院テロの復帰にもご融資してくださいました」

「……本は、売れないもんを捨ててるだけだ。それに、病院に金を入れたのは妹さ」

市長の秘書らしい女の返答に、店主は珍しく言葉を詰まらせる。確かに、普段の言動と比べるとその実績は恥ずかしすぎる。一体、この店の何処に儲かる要素があるのかは不明だが、市長の秘書が言うくらいなのだから嘘ではないだろう。「うーん。意外。店長って案外金持ち？」

「はっ！　普段は世捨て人のようにしとる癖に、そんなことをしとるんか」

「うるせーな。兎に角、俺は体育祭なんて下らないイベントに参加する気はないね」

「くだらないって、この地域の今後を憂いた市長の……」

「何でそれが体育際になるんだよ！　あー、言わなくていいぞ。どうせ、政治屋が何かを思いつくことほど、利己的ことはないからな。

これ以上俺を失望させないでくれ」
「はは、言え取るの。おお！　急所来た！」
「っしゃ！　強運ピントなめんな！」
「話を聞いていますか？！」

ゲームをやめろと叫ばない辺り、まだ店主を理解しているなと、小野は冷静に分析をした。やめろと言ってやめるのであれば、それは店主ではない。
もっとも、それをわかって「やってください」と言っている辺り、まだまだだ。

「聞いてるよ。第一、体育祭で何でチームをわける必要があるんだよ」
「何！　電気でふゆう？　卑怯じゃろうが！」
「関守うっさい！　買え！　自分で買え！」
「当日販売なしだなんて思わんかったんじゃ！」
「予約しろよ！　買えるわけねーだろ！　ドラクエ３の時代とは違うんだよ！」

もう体育祭そっちのけな二人に、秘書の女性は溜め息をついた後に話を進める。

「はあ。もう片方の軍は盃さんが心良く引き受けてくださいましたよ？」
「ああ、そう言えば、拙者も嵐から『本屋に軍団長やれよって言っとけ』と頼まれたんじゃった」
「っは！　あいつがやるから何だよ？　俺はそんなチームに別れて仲良しこよしなんて勘弁だね」
「なんでです？　ちゃんと報酬はお払いしますし」
「報酬だ？　俺は寄付するくらい金には困ってないんだよ」

「じゃあ、何が不満なんですか？」
「だから、体育祭だよ。っていうか、スポーツ競技が気に喰わね」
その発言に、小野は思わず声を出して笑いそうになる。前の宗教勧誘の時もそうだったが、店主は本当に誰にでも偉そうに自分の意見を語る。
「何だよ、オリンピックの真似事なのか？　あれは？」
「さ、さあ」
「うん？　日本にその文化を持ち込んだのは海兵学校だったと記憶しておるが？」
なんでそんな事知ってるんだよ。
「本格的に復旧し始めたのは、北海道の農学校だっかな」
「トイレの花子さんと言い、北海道は流行の最先端じゃの」
しるかよ。と、秘書が呟いたのを見て、小野は深く同意した。論点がずれている所の話ではない。
「まあ、何処の誰が何処で始めようとも、結局は『オリンピック』がモチーフだろう？」
紀元前からあるあの体育の祭典。オリンピック。
体育祭や運動会と言ったイベントがその影響下にない。なんてことはありえないだろう。
「俺、あれ嫌いなんだよ」
「オリンピックって、好き嫌いで判断するモノなんですか？」
「そうなんだよ」

ぶっきらぼうに言って、店主はゲーム機を閉じる。ようやく話をする気になったらしい。

「何であんなわざわざ馬鹿みたいに集まって、走ったり跳んだりしてんだよ。俺は、あいつらよりよっぽど、サービス残業して疲れて家に帰って、自分で味噌汁を温めてるお父さんの方が偉いと思うね」

「はあ。それはそうかもしれませんが」

「そうなんだよ」

「まあ、確かに世界一足が速かろうと、『凄い』としか言えんの」

小野は心の底から。「あんたら、仲が悪い設定はどこにいったの？」と叫びたくなった。

多分、久々にあってテンションが上がったとか、それくらいの正拳突きだったのだろう。もしかしたら、体育会系的な「お久ぶり」だったのかもしれない。

真実を言えば、六年程音信普通だったのだが、あれをきっかけによりを戻したと言うだけのことだ。三十年も生きていれば、自分の間違いを認めるくらいのことは店主にもできるようだ。

「あいつら、スポーツ選手って言うのは、努力家やら天才やら言われているけど、実際は有限な時間を無意味な記録に費やして、貴重な資源を走るためだけの身体に浪費して、複数のサポーターをたった一人の記録の為につける馬鹿馬鹿しい存在だぞ」

「全否定ですか。スポーツがお嫌いなんですか？」

「昔はそうでもなかったんじゃがの」

「うるへー。俺が言いたいのは、飛んで走ってなんか程度のことで騒ぎすぎだよ。棒を持って球を打つことを、高尚なことのように祭り上げるんじゃねーよ。そんなこと、わざわざテレビで取り上げて一喜一憂することか？」

「お主、捻くれているとかそう言うレベルを外れ始めたの。昔はまだ、理論的だったのに」
「嫌いなものを好きになる必要はねーよ。これが屁理屈って言うんなら、まっとうな理屈で説得してみてくれよ。おれは重箱の隅を貫通するまで突いて、自分の意見を曲げねー」

無駄に格好いい！　のだろうか？

「肉体を動かすのは良いことだ。健康的にも精神的にも、それは素晴らしいことだぜ？　だからこそ、付加価値なんていらないんだよ。特に、絆だとか協調性とかの同情精神丸出しの弱者の持ち物はな」
「あの、話が大きくなってませんか？　私たちはオリンピックをやるのでも、全員で一致団結してメジャーリーガーを倒すわけじゃあないんですけど。店主さんには代表になっていただきたいだけでして……」

ゲームを止めた途端、流れるように喋りはじめた店主に困惑しながらも、女秘書は冷静に論点のすり替えを防ぐ。小野だったら確実に流されて頷いている所だ。
職業意識からか、それとも人の話を真面目に聴くことが出来る人種なのか、普段ならそれは素晴らしいことなのだろうが、

「そんな事いっても無駄だって」

店主にとっては無謀の一言だ。
それだけ正論を言おうと、店主がやりたくないのなら、絶対に首を縦に振ることはない。たった今喋ったことが理由ではなく、やりたくないから、それらしい言葉を並べているだけに過ぎないのだ。
盗み聞きにも飽きた小野は、「おじゃまー」といつも通りに店内に足を踏み入れた。

これ以上、真面目な人間が店主の為に苦労するのも可哀想なので、ここらで終わらせようと思ったのだ。

「ん？　小野か。冷やかしか？」「おう。ひさしいの。なつめちゃん」「こ、こんにちは」

三者三様の挨拶を聴いて、小野はなるべく平常心を心掛けてカウンターに近づいて行く。なるべく、自分がずっと話を聞いていたと思われていない方が、作戦は成功するだろうから、ちょっとした舞台にでも上がっている気分だ。

ひょっとしたら、気配とかのわかりそうな関守には気づかれているかもと思っていたが、杞憂だったようで、二人は警戒心なしに小野がカウンターまで来るのを黙って見ていた。

「店長。まとまる君一個ちょーだい」

「勝手に探せよ……狭い店なんだから」

「いや、カウンターの上に置いてあるから……って、この人は誰？　噂の多鞘さんの彼女？」

頭の中で想定下通りの台詞のやり取りに緩みそうになった。

「いえ、私は店主さんにお願いがあって」

「お願い？」

「おう。何でも、あいつに今度の市の体育祭の団長になって欲しいらしい」

関守の説明に、小野は思いっきり吹き出して見せた。そして、魔法の台詞を言う。

「何それ？　冗談でしょ？　店長にそんなことできるわけないじゃ

ん」

消しゴムをレジに通していた店主の腕がぴたりと止まり、関守は小野の企みに気が付いたのか、嬉しそうに笑みを作る。説得する手間が省けて丁度いい。そんなことを考えたのだろう。

その二人の要素を視界の端に捉えながら、小野は半分成功したようなものだと心の中でガッツポーズを決める。

押してダメなら引いてみろ作戦は、どうやら大当たりのようだ。

「ねーちゃん。やってやるよ」

「「「え？」」」

「俺が、団長？　をやってやろうじゃあないか」

などと小野が考えている間に、店主は立ち上がると、腕を組みながら堂々と宣言した。それとは対照的に、三人はあまりの変わり身の早さに呆然とするしかなかった。さっきまでの長い口上はなんだったんだと、意見を変えさせようとしていた小野ですら驚くほどだ。後二三の挑発するような言葉を考えていたのだが、やはり店主は小野の考えを遥か斜めに超えていく。

「そもそも、オリンピックの競技ってのは、神に捧げるために行われた宗教性の高い儀式みたいなもんだ。神様は嫌いだが、それに伴って人類の文化が成長した事実からは目を背けることはできねー」

「いや、そんな宗教的な行事ではないんですけど……」

「だいたい、大切なのは自分の記録を塗り替えようとする、意志だからな。その意思があるならどれだけ非生産的な行動だろうと……」

「店長、消しゴム四個もいらないよ」

「はあ、しかし単純なお方なんですね」
「ん？　あいつのことか？」

本屋からの帰路についた秘書は、線路沿いに足を進めながら先ほどのやり取りを思い出していた。独り言にも思えたその言葉を丁寧に拾って、隣を歩く関守が笑って見せる。「危ないから送って行く」と言ってきかなかったので、一緒に歩いているわけだが、どう考えてもこの町には関守以上の不審者はなかなかいないだろう。
それはさておき、先ほどの店主だ。
たかだか女子高生の安っぽい挑発で、掌を返したと言うべきかなんと言うべきか、凄まじい勢いで意見をひっくり返していた。
どれだけプライドが高いんだろうか？

「たわけ、それは違う」

秘書の言葉に、関守は呆れたように呟く。

「プライドの高い人間はそうそう意見を変えたりはせんし、あいつが単純な男でない事は拙者がよう知っておる」
「すいません。失言でした」

知人を単純と言われて良い気分になる人は少ないだろう。失礼なことを言ってしまったと、秘書は頭を下げる。
関守のその静かな物言いに、すこしだけ恐怖を覚えながら秘書が問う。
「では、どうして急に意見を変えてくれたんでしょうか？」

関守は、一瞬困ったような顔をした後、「変な意味じゃあないぞ？」と前置きをする。

「あいつは、あの年頃の女の子に弱いんじゃよ」

「……」「……」

「変な意味意外、どんな意味があるんですか？」

（後書き）

なくても問題ないものばかりで、世の中ってできてますよね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9631n/

運動会と体育祭の違いって、玉入れがあるかないかだけ？

2010年10月9日03時31分発行